



Title	雑誌の再出発によせて
Author(s)	
Citation	a+a 美学研究. 2017, 10, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90154
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学美学研究室は、二〇〇一年に研究室紀要『美学研究』を創刊して以来、第九号まで発行してきました。このたび美学の知をより多くの皆さんと共有したいという思いから、従来の紀要のありかたを見直して、新しいタイプの雑誌『a+a 美学研究』として再出版することにした。わたしたちの願いは、捨てて欲しくないという一言につきます。そしてそのために、捨てられないだけの価値のある知のメディアのありかたを考えました。たしかに雑誌の電子化はこれから進むでしょうから、紙という物質媒体の良さをいまいちど見直して、紙面から思想がにじみで出るようにしようとも思いました。こうした知のメディアのありかたを提案すること自体、今後のわたしたちの課題とみえています。探求はなお続きますが、読者の皆さんにその一端をご覧ください。ただきたく思っています。

大阪大学美学研究室は、美学思想研究をたんに思想史の文脈にとどめずに、実際の芸術活動とのつながりを重視することを、創設以来の伝統としてきました。雑誌の名に加わったa+aもそうした背景をあらわしています。一方のaは美学であり、他方のaは芸術であり、アンド以上のつながりを志向しています。現在わたしたちはその考えを拡張して、美学という学問がいかに日常生活とかかわりを持てるのかという関心を強めています。授業においては、美―芸術―感性にかかわる身近な事柄について疑問を持つところから始まり、過去の思想と向き合いながら思索を深めたのち、美―芸術―感性にかかわる身近な事柄へと戻っていくという循環をことのほか大事にしています。そのようにして、過去の思想への理解はより深まりますし、現在の私たちの生活のありかたを見直したり、豊かなコミュニケーションを創出したりする手がかりにもなります。

大阪大学美学研究室は、芸術をその周縁から考えていく役割をおのずと担っています。大阪大学の文学部はほかに「美術史」「演劇学」「音楽学」「文芸学」の研究室をもっていますので、大阪大学の「美学」はジャンルに制約されない芸術のフロンティアを探索できる場であるわけです。今日ますます芸術を定義するのが困難になっているのは、周縁がたえず更新されていて輪郭が定まらないためでしょう。それならば、芸術がいま何であるのかを考えると、芸術をその周縁から考えてみるのはきわめて有効な方法であるはずで、美学研究室の一つの特色をなしてきたのはデザイン史研究ですが、現在デザインの語のもとでいわれる諸分野もまた非芸術と接しているかぎり、芸術の周縁といえます。わたしたちと一緒に、建築・工芸・家具・製品・衣服・印刷など、日常生活に直接かかわりのある諸活動についても理解を深めることもできます。

記念すべき本号は、二〇一七年三月をもってご退職された、三宅祥雄先生、藤田治彦先生、両先生への感謝の気持ちを込めて編まれました。お二人の先生は、美学研究室の発展のために長きにわたってご尽力なされました。先生がたのご功績にあやかりながら、わたしたちは、美学の名のもとで研究力とともに教育力をやしなえる場をつくりたいと考えています。本雑誌はそのような思いをかたちにしたものです。今回はこの雑誌の新たな出発のために気鋭の研究者の皆さんに寄稿をお願いしました。執筆にあたっては、学生たちに独自の「視点」を提示するつもりで書いてくださいとお頼みしています。したがってこれが唯一無二の研究をおさめた美学論集であるとともに良質の入門書として多くのかたに手にとっていただけたることを願っています。

二〇一七年三月三十一日